変身

M.Tetsuo

※本作品は、縦書き表示を実現するため画像ファイルで構成されており、文字サイズが変更できません。
ご了承くださいませ。

変身

出張から帰ってきたらスーツに長い茶髪がくっついていて、ポケットからは女性の安っぽい名刺が出てくる、なんていうのは昼のメロドラマの中だけの話だと思っていた。こんなことが現実に、しかもわたしの夫に起こるなんて……。

もしやと思って夜中にこっそり彼の携帯電話を確認したら、源氏名らしき名字のない女性の名前が何件も登録されていた。これはもう間違いない。まじめ一辺倒で、わたしと付き合うまで女性を知らなかったというから「このひとなら絶対大丈夫」と思って結婚したのに。

明くる日の夜、寝室でシクシク泣きながら小一時間問い詰めると、夫はあっさり謝罪した。

「隠していて悪かった」

夫はそう言って深々と頭を下げた。それから背後のクローゼットの扉を開き、服をかき分けて奥から見たことのない旅行カバンを取り出し、鍵を外して蓋を開けた。なかには女性ものの服や長い茶髪のカツラがきちんと収まっていた。

「……これは……俺の服なんだ」

夫は自分が女装をするに至った経緯を、理路整然とおごそかに語ってくれた。こんなときにも几帳面なひとなのだ。

生真面目な自分の性分を自分でもひどく息苦しく感じていたときに、たまたま人に誘われたのが始めたきっかけだったそうだ。やってみると、とても解放された気分になれたので、それ以来二カ月に一度、同じ趣味を持った仲間の集まりに出るようになった。女性の名刺もそのときに夫が使うとのこと。女装したときの名前は「アケミ」ちゃんで、携帯電話に登録されている源氏名はその仲間のものということだった。

話を終えてうなだれている夫にわたしは言った。「なにもやましく思う必要はなかったのに」と。「そのくらいのことじゃ嫌いになったりしないわよ。わたしたち夫婦でしょう、もっとわたしを信頼してよ。なんでも正直に話しましょうよ」

わたしの言葉に夫は嗚咽を漏らして感動してくれた。単純で、素晴らしくいい人だわとわたしは思った。深く安堵する一方で良心がすこし痛んだ。

わたしはかつて男性だった。

十七歳で性同一性障害と診断され、ホルモン療法を開始し、三年後に性転換手術を行い、裁判所への申し立てを経て晴れて心も体も社会的にも女性となった。夫と出会ったのはその後のこと。ただこのことは、良心が痛もうともこの人に知られるわけにはいかない。

夫婦だからといってなんでも正直に話せるわけがない。

変身

http://p.booklog.jp/book/54251

著者：M.Tetsuo
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tetsuo-m/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/54251

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/54251

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ